

6月17日は、新型コロナウイルス感染
拡大防止に配慮し、お弁当に変更された

この灯が
誰かの道しるべ
となりますように――。



能令 証子 Nouryo Akiko

昭和53年生まれ。小国町出身、小川町在住。図書館での読み聞かせボランティアは13年以上、小学校での丸付けボランティアは5年以上続けている。花まつりを企画し、近所の寺や商店街と地域活性化にも取り組む。趣味が高じて京都の製菓専門学校で助手をしていた経験も。



昨年12月の灯おてらでごはんには100人以上の人々が集まった
おてらおやつクラブの菓子はくじ引きに
毎週水曜日には寺子屋が開かれる
地域交流イベントを企画 スタンラリーをしながら地元商店街を巡る子どもたち

人輝宇

 vol.51

「口頬張れば伝わるぬくもり。愛情いっぱい料理は、子どもたちの心をときほぐす。食堂に集まった者同士、触れ合いながら囲む食卓はとてにぎやか。ここは「灯おてらでごはん」。小川町にある子ども食堂だ。子ども食堂とは、温かな団らんを提供する社会活動。貧困対策や孤食の解決、地域交流拠点としての役割も期待されている。この食堂を切り盛りしているのは延福寺の坊主、能令証子さん。地域交流を目的に、また、食事を通して家族の大切さを再確認し、感謝の心を育もうと昨年の7月に始めた。「子どもの笑顔が私の原動力。『次はいつあると?』と聞かれると、本当にうれしいですね。」と頬を緩ませる。

2 カ月に1回開かれるこの食堂には、0歳から70代までの100人以上が訪れる。また、延福寺では毎週水曜日に寺子屋が開かれ、小学生や中学生たちの自主学習をボランティアがサポートする。

「私」 にとって、お寺は人が集まる場所なんです。実家が寺だったこともあって、幼い頃から家に家族以外の誰かがいることが当たり前でした。父はもらってきた鉄棒やブランコを置いて公園を作り、母は花まつりや子ども研修会を開いていて、いつもにぎやかでしたね。」

「子」 子ども食堂を始めたのも、昨年完成した門徒会館を生かしたいと思ったこと

とがきつかけです。地域の集いの場となり、行き場のない子どもの逃げ道にもなればと思っただけです。助けを求める子どもにも「見てくれる大人はいらんだよ。逃げられる場所があるんだよ。」と伝えられたい。そして、子ども同士も見守り合うようになってほしい。」

「食」 材は近所からの頂き物やフードバンクを利用する。みんなの厚意が詰まった食材は粗末にできない。だから、食材を使い切るために品数が増え、調理ボランティアはいつもフル稼働する。しかし、「みんな能令さんの気持ちに賛同しているんです。だから手伝いたいんです。」と話し、事前のメニュー選定から、手順の確認、当日の食事づくりまで総勢20人以上が精を出す。

「調」 理だけでなく、寺子屋にも手伝いに訪れる松橋町の杉山清美さんは、「能令さんの思いを知って一緒にやりたい」と始めました。新しく物事を始めるのは勇気がいること。学童保育をしていた私の経験も生かし、少しでも手助けになれば。」とほほ笑む。

「子」 どもだけでなく地域の人たちにも来てほしいですね。ここで温かいごはんを一緒に食べて、ほっとしてもらいたい。」

「灯」 は世の中の闇を照らすもの。それは決してまぶしくはない。けれどそつと導いてくれる。だから灯と名付けたんです。この灯が誰かの道しるべとなるように――。」

彼女の柔らかな心は慈しみにあふれている。